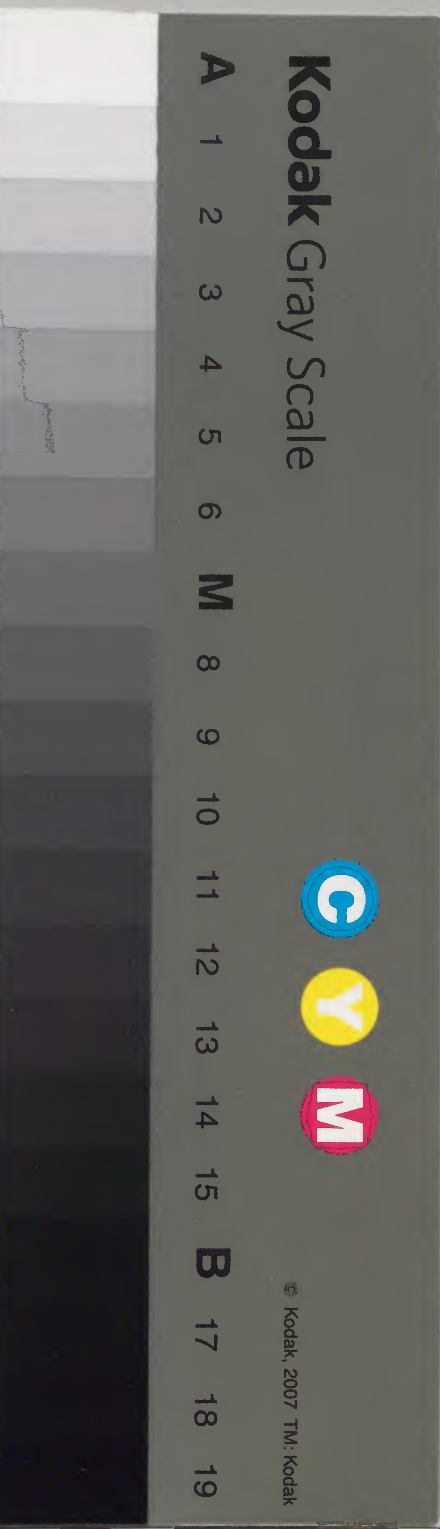


茶業必要
上

內務省圖書
第一四九二番
部.....號
二.....冊

284
內務省文庫
和書類
七三九五號
二冊
一八三函
七架

內閣文庫		茶帛
番號	和 7395	
冊數	2 (1)	
函號	183	284



上林鮎次郎
江口高廉

編述

定價六十錢

茶業必要

明治十年八月

編者藏



耕

茶業必要序

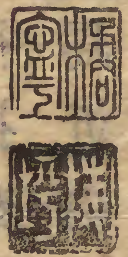
茶說自古有之。茶書至今加多。本邦之
茶製。美則美矣。精則精矣。然未得投泰
西人之嗜好。故販鬻之道甚窄焉。近頃
有志於茶業者。雖往力擬做紅綠茶製。
而猶未能適其常度。是以所得不償所
失。幾不免有迷津之嗟也。上林子以茶
業。刻苦多年。今著此書。簡而要。語而詳。

上林鮎次郎

蓋往古茶說之所未說到。輒今茶書之所未論及者。粲乎可觀矣。是謂之茶業之津路。非誣言也。讀者宜玩索焉。

明治十年九月

梅坪居士識



緒辭
 余カ友上林氏本城州宇治ノ生也其先ハ赤井氏
 ニシテ歴世丹波ニ在ス天正年間織田氏四方ヲ
 經畧スル日其將明智光秀ヲ丹波ニ封ス是ヲ
 以テ明智氏ノ爲メニ其所領ヲ押奪セラルル
 兵馬ノ業ヲ抛脱シ居テ城州宇治ニ卜シ茶ヲ以
 テ自ラ娛ム故有テ上林ノ稱也時ニ京師茶事甚
 盛ナリ諸侯伯ノ點茶ヲ好ム者相來往ス故
 ニ上林氏ヲ茶名當時ニ高シ其子孫世々宇治ニ
 住シ茶業ヲ合シ社林子楓ニ其業ヲ從事

シ深ク栽培方法ヲ窮ム後ニ肥後ニ赴ク蓋
其祖先曾テ細川幽齋三齋ノ兩公ヨリ以來舊肥
後侯ニ因故有ルヲ以テナリ而ソ茶業既ニ熟ス
ト離ヒ自ラ足レリトセズ長崎ニ遊ヒ支那製茶
ノ人ト交リ其方法ヲ敵ク阻ツ之ニ授クルニ宇
治ノ製方ヲ以テシ而ソ彼レカ紅茶ノ製ヲ傳習
スルコト得タリ上林子其稟質小節ニ區々タラ
ス成産ヲ肩トセズ唯大ニ茶業ヲ天下ニ開クヲ
以テ志トス四方ニ歴遊シテ我國茶ヲ産スルノ
地ハ處トシテ至ラサルハ無ク足跡殆ト天下ニ

周シ而シ汎ク内外人ニ交リ一ノ方法ヲ得レハ
則之ヲ推窮シ之ヲ經驗シテ必ス其宜キヲ得サ
レハ措カス是ノ故ニ其業益進ム曾テ以爲ラク
物産ハ販賣ノ道ト運輸ノ便トヲ開カサレハ蕃
盛ニ至ラスト是ヲ以テ深ク販賣ノ方法運輸ノ
便否ニ注意ス時ニ巨利ヲ得ルコト有リ然レモ之
ヲ貯蓄セズ必ス其財ヲ以テ此ノ事ニ試ム或ハ
蹉跌シテ囊ニ一錢ヲ有セスト雖モ恬トシテ意
トセス終ニ其心志ヲ屈スルコト無ク必ス其所思
ヲ達セント欲シテ他ヲ顧ミサルヲ以テ或ハ漫

然不羈ノ形無キニ非ラス人或ハ之ヲ以テ滿テ
リトセサル者アレモ是レ其素志ヲ知ラサル者
ト云可シ一日余カ僑居ヲ訪ヒ謂テ曰當今各國
ノ賀易日ヲ逐テ昌ナリ以テ大ニ國ノ殷富ヲ爲
スノ時也然ルニ茶ハ我國産ノ第一タレモ民未
タ舊習ニ固滞シテ時世ノ好尚スル所ニ詳悉ナ
ラス璧ヲ抱テ淵ニ沈ムカ如キ者少カラス實ニ
憾ミ有リ全國ノ茶業一變セサル可カラス今幸
ニ勸農局大ニ力ヲ此ニ施ス何ノ慶カ之ニ過キ
ン我鄙卑ナリト雖モ豈之ヲ傍觀ス可ケンヤ故

ニ會テ聞見スル所及ヒ經驗スル所ノモツヲ輯
録シテ以テ天下ニ公ニセント欲ス請フ予之ヲ
翼ケン乎余對曰茶ト糸トハ我國天賦ノ其産ニ
シテ國ヲ富スノ要品ト謂可シ方今ノ務ハ民ヲ
シテ之ヲ務ムルヨリ先ナルハ無シ然レモ
時好往昔ト異ナリ其製以テ舊習ヲ株守ス可ラ
ス我亦之ヲ考ル所無キニ非ス而メ予カ茶ニ志
ス既ニ久シ其心思ヲ勞スル亦大ナリ今之ヲ
個ノ襟裡ニ秘セズ汎ク天下ニ公ニシテ國益ヲ
興スノ萬一ヲ補フテ庶幾フ余甚々之ヲ嘉ス

謝劣ヲ顧ス以テ其美ヲ贊成セシ終ニ相共ニ議
テ日本茶ノ因由及利害得失傍ラ支那印度ノ茶
業ノ顛末ト其外自他各國諸氏ノ論說ノ時用ニ
切ナルモノトヲ採録ス諸氏ノ論說ハ或ハ其人
名ヲ記シ或ハ記セサルモノハ字ヲ關テ自家ノ
說ト混同セス而ソ自家ノ說ハ試驗ヲ經サルモ
ノハ之ヲ記セス又勸農局ノ記冊中ニ係ルモノ
モ同ク之ヲ分別ス且ツ緊要ノ條中ニ於テハ文
字ノ煩細及ヒ卑陋ヲ厭ハス之ヲ叮嚀ニシ間又
左傍ニ其義ヲ記ス假左名僻鄉不學ノ民モ之ヲ解

シ易カラシメンカ爲メナリ然ルニ茶業モ亦其
事廣シ故ニ其脱落無キハ保ツヘカラス且ツ印
度及爪哇ノ茶業上ノ論說並經驗其他益有ルモ
ノ少カラスト雖ヒ緩急ヲ考較シテ之ヲ後輯ニ
附ス而シテ又事ハ日ニ開進スルヲ以テ後來必
ス良好ノ發明ヲ爲ス者有ラン其發明ト脱落ト
ノ如キモ亦之ヲ得ルニ從テ他日ノ再輯ヲ期ス
今將ニ斯書ヲ刊行セントス故ニ上林氏カ家系
及履行ヲ畧記シテ此書ヲ爲スノ志其素有ルヲ
表シ併セテ卷中ノ記體ヲ書シテ以凡例ニ代フ

明治十年六月

江口高廉識

茶業必要目次

上卷

總論

第一條

茶樹栽培ノ事

第二條

採茶ノ事

第三條

支那茶園培養採葉ノ說並移植ノ說

第四條

茶ノ品位並效用及荒茶分析表

下卷

第五條

製茶ノ時以好尚ヲ詳別スル事

第六條

茶園ノ擴大ヲ便利トスル事

第七條 茶ノ價格ヲ知ル可キ事
第八條 米國紐育日本領事富田氏茶市變革
ノ說

第九條 日本製茶ハ各國ニ普及セリ事並
輸出茶斤數

第十條 本色茶製方概畧

第十一條 支那本色茶製方畧說

第十二條 紅茶製方概畧

第十三條 支那紅茶製方畧說

第十四條 本色茶紅茶製方費用並耕地ト茶

園トノ比較表

第十五條 千八百七十五年米國茶商報告並

同國輸入茶課稅議案及富田領事官見込書

第十六條 紅茶制器械ノ圖

位ニ適シテ人ノ購求多キハ必ス滯留患
無シ諭ヘ其物品ノ本質ハ美良ナリ
適セズシテ購求スル者無キハ天地間
贅物タルヲ免レテ蓋シ世ノ開クルニ從
嗜好モ自然ニ起キテ變シテ從來必需ノ物モ或
ハ必用ナラサル物トナリ昨日マテハ顧ミサル
所ノ品モ今日ハ至要ノ品トナルモノ有リ故ニ
己デニ物品ノ本質有ラハ時世ノ好尚スル所ヲ
詳カニシテ以テ人工ヲ施サバ尠可カラス夫レ
茶ハ我國輸出品ノ第一タル產物ナリト雖モ人

未タ周々各國ノ好尚ヲ詳ニセサルヲ以テ或ハ
舊習ニ拘泥シテ各國ノ情ニ適セス時トシテ販
賣蝸通ノ道滯滞スルヲ有リ或ハ濫製ニ因テ國
産ノ聲價ヲ墜スコト有リ斯ノ如ク人生必需ノ良
品ヲシテ斯ノ如キノ患有ラシムルハ惜ム可キ
コトナラスヤ其淵源ヲ繹ヌルニ然ル所以無キニ
非ス抑我國ノ茶ヲ愛翫スルハ之ヲ支那ニ依テ
得ルモノ多シト雖モ之ヲ賞味スルコト既ニ久ク
其品位ヲ定メ其風味ヲ辨スルコト精且密ニシテ
今ニ至テハ却テ支那ノ上面ニ出ル者ノ如シ然

レモ一種高尚ノ翫味物トナリテ之ヲ人生必需
ノ物トセサルカ爲メニ其精微ノ發明モ或ハ人
間需要ノ實ニ於テ欠ク所アルニ似タリ却テ實
用ヲ爲ス所ヲ視レハ支那流ノ釜熬製及ヒ民間
日用ノ粗惡ノ茶ニ在リト謂フモ可ナリ而シテ
釜熬製ハ舊習ヲ墨守シ民間日用ノ茶ハ自己ノ
口腹ノ用ニ充ルノミノ物トスルカ故ニ歲月ヲ
經ルト雖モ素ヨリ製方ノ精粗ヲ擇マス亦栽培
ノ事ニ於テモ思ヲ凝ラズ者無シ然ルニ日本茶
ノ栽培及製成ノ方法斯ノ如ク上進セシハ特リ

彼ノ高尚ノ翫味物ト爲ス人ノ心ニ根基シタル
モノト云フ可シ往時足利義政大ニ茶道ニ耽リ
シヨリ以降高貴ノ際ニ流行シテ繼テ織田豊臣
氏ノ如キモ之ヲ娛ミ之ヲ貴ヒ以テ大饗ノ重例
トスルニ至レリ而メ諸侯伯モ亦之ニ效ヒ大ニ
點茶ヲ競フ此ノ時ニ當テヤ相將公伯多クハ京
師ニ湊マルカ故ニ京師ハ則テ茶ノ大市場ナリ是
ヲ以テ宇治茶ノ精巧且蕃盛ナルハ獨リ宇治ノ
地裁茶ニ適スルノミナラス一ハ京師ニ接近シ
テ販賣融通ノ便利有ルカ爲メナリ且ツ其相將

公伯ニ次テ需用スル者ハ巨家豪族ノ徒ニシテ
皆價ノ低昂ヲ慮ルノ輩ニ非ス是レ則宇治茶ノ
美譽ヲ天下ニ擅ニシテ價ノ騰貴際限無キニ至
リシ所以ナリ是故ニ栽培製法共ニ其精微ヲ窮
ノ費用ヲ顧ミス人力ヲ吝マス之ヲ製出スト雖
其價直之ニ應スルヲ以テ利潤ヲ得ルコト益大
ナリ故ニ天下ノ人皆茶ノ栽培製法ニ至テハ宇
治ヲ以テ宗トセサル者ハ有ラス悉ク規矩ヲ之
レニ取ル而メ一モ宇治ノ上頭ニ出ル者ナシ近
世外國貿易ノ道開ケテ以來茶ノ輸出年々逐テ

増加ス而シテ衆人始メテ以テ國ノ產物タルヲ知
リ昔日ヨリ認テ以テ一種高尚ノ翫味物トスル
心下日用尋常ノ飲料ニ供スルヲミシテ情トチ一
變シテ巨利ヲ占ムルノ重品トシ種裁日ニ蕃盛
セリ然ルニ外國人ノ茶ヲ購求スルハ是レ亦人
間ノ飲食中欠ク可カラサルノ物タルヲ以テ日
用尋常ノ飲料ニ充ツルカ爲メニシテ高尚ノ翫
味物トスルノ情ニアラス故ニ其價格モ亦廉ナ
ルヲ喜ブハ人情ノ常ナリ然ルニ方今我國ノ人
民競テ種裁スルハ外國輸出ノ目的ナレ其種

栽及培養ノ方法ハ皆之ヲ宇治ニ效フ宇治ノ方
法固リ其精微ヲ窮ルカ故ニ栽培皆能ク適應ス
ト雖モ宇治ハ所謂高尚ノ翫味家ノ需求ヲ目的
トスルヲ以テ其資本ヲ多ク消費スレモ其價亦
能ク之ニ充テ、餘リ有リ外國輸出ヲ目的トス
ル者ハ之ニ異ナリ宇治ノ方法ニ效フテ而シテ其
資本ヲ多ク消費スルトモ價格大概際限有ルヲ
以テ得ル所ヲ以テ費ス所ヲ償フニ足ラスシテ
往々其家ヲ破ル者有リ産ヲ興サント欲シテ却
テ産ヲ失フハ職トシテ之レニ因ル

大凡栽培スル人々製方ニ精シカラス故ニ製方
ニ練熟スル人ヲ備情シテ之ニ依頼セサルヲテ
得ス既ニ之ニ依頼スレハ製方ニ關係スル所ノ
權力ハ其依頼セラレタル人ニ歸スルハ勢ノ止
ム可ラサルモノニシテ喻ヘハ事其製方スル人
ノ意ニ満タサレハ則斯ノ如ク爲サレハ茶ノ品
位ニ害有リ或ハ製スルニ便ナラスト種々ノ苦
情ヲ舉ルルハ茶園ノ主人ハ否ト思フトモ其利
害得失ニ暗キヲ以テ止ムヲ得ス枉ゲテ從ラ
サルヲ得ス然ルニ又製方スル人ハ多クハ販

賣上ノ事ヲ解セス只茶ヲ製スルノ一途ニ心ヲ
注クヲ以テ其費用ヲ厭ワス茶ノ品位ヲ良貴ナ
ラシムルヲ主張スルノミ且ツ其製方人ハ販
賣上ノ事ヲ解セサルノミナラス栽培ノ事モ亦
委シカラサルヲ以テ全軀ノ費用ヲ料ルヲ能ワ
サルカ故ニ之カ爲メニ得失相適セサルニ至ル
モノ尠カラス之ヲ要約シテ論スレハ栽培スル
人ハ製方ヲ知ラス製方スル人ハ販賣上ノ價格
ヲ知ラサルノ弊失ト謂フ可シ是レ又人ノ免レ
難キ所ノ弊ナリト雖モ得ル所ヲ較ラヌシテ資

本ヲ費スハ破産ノ基タリ慮ラサル可ラス或ハ
云事業ハ其向フ所ニ專ラナラサレハ其精巧ヲ
盡スト能ハス故ニ物ヲ製スル人ハ其價ヲ顧ル
可カラスト是レ只一偏ノ論ナリ第七條ニ於テ
之ヲ詳論スヘシ
凡ソ人ハ先入主ト爲ルカ故ニ從來我カ習熟セ
シ事業ヲ更轉スルハ人情ノ最モ難キ所ナリ況
ヤ宇治製ノ如キ其精微ノ蘊奧ヲ窮メタル者ヲ
ヤ然ルニ宇治ノ如キハ其名譽既ニ全國中ニ周
ク知ラサル者無ク且ツ其産出ノ數モ國內翫味

者ノ需用ニ供シテ猶足ラサルヲ以テ假令舊來ノ業ヲ株守スルトモ産ヲ破ルニ至ラサル可シ其他ノ各地ニ於テ宇治ニ效フ者時世ノ位ヲ察セサルキハ栽種ハ年々蕃殖シテ需求ノ人ハ之ニ應シテ多キヲ加ヘサルヲ以テ必ス失損ノ思ヲ免ル可ラス又民間自家ノ飲料ニ充ルヲ目的トシテ粗悪ノ製ヲ以テシタルモ再製ノ力ニ因テ一時ハ外國ニ輸出スレモ外國モ漸次茶味ニ精密ナルカ故ニ終ニハ厭嫌セラレテ購求スル者無キニ至ル可シ而シテ此ノ粗製ハ欺騙者流ノ

商人濫製ヲ爲スル淵源ナレハ速ニ舊習ノ製ナ更革セザレバ日本製茶ノ聲價ヲシテ低落モシムル先導トナル可シ今夫レ宇治ノ製ニ效フモ本色紅色ヲ製得爲スモ能ク其地ノ位ヲ量計當今ノ好尚ヲ察シ購求スル人ノ多寡ヲ料リ本資ノ消費ト賣價ノ貴卑ヲ較計シテ而シテ其業ヲ營ム可キコトナリ然ラズソ先入ヲ主トシ舊習ヲ泥シ貴重大益ノ國産ヲシテ泥土ニ均シカラスム可カラス以上論スル所ハ我國製茶ノ因故及利害得失

最モ大ナルモノヲ舉ケテ茶業ノ人以深ク注意
セシムル所ニシテ固ヨリ宇治製ヲ棄却排
斥スルニ非レバ高尚ノ翫味物トナリ人生ノ必
需物トナル所以ハ辨セサル可ラス而シテ翫味物
ハ求ル所ノ者寡ク必需物ト購ル所ノ者衆レ是
レ則國産ノ盛衰ニ關係スルヲ大ナルヲ以テ反
覆之ヲ論スル所以ナリ且ツ宇治ノ製方ハ世人
傳習スル者既ニ多シ是ヲ以テ此ノ篇ハ之ヲ畧
シテ以テ本色紅色茶ノ製方ヲ主説トスル也
第一條 茶栽培ノ事

當今茶木ヲ種裁スル人日ニ多ク栽培ノ方法共
ニ大ニ開ケテ益上進ノ勢有リ故ニ今殊更ニ之
ヲ記載スルハ頗ル蛇足ナリ且ツ地形ニ因テ各
其宜キヲ異ニスレハ一定ノ方規ヲ以テ論シ難
シ是ヲ以テ今此條ニハ其細故ヲ畧シ目途ノ大
要ニ記シテ栽培者ヲ參考ノ一助トス
凡ソ平園一反歩ニ八百株トス然レバ斜園山園
殊別ニ因リテ一概ニ云ヒ難クト雖モ大畧
之ヲ以テ目的トスレバ其適宜ヲ誤ルコト鮮クカ
ル可シ

播種ノ方ハ或ハ圓形ヲ善シトシ(即チ株植エ)或
ハ直形ヲ善シトスレモ(即チ畦植エ)大ニ利害ノ
懸隔スルヲ見ス其人ノ信然スル所ニ從テ可ナ
クニ
三年間ハ茶株未タ長茂セサルヲ以テ畦間ニ他
ノ耕作ヲ爲スヲ要ス其耘鋤ノ力ニ依テ大ニ培
養ノ功ヲ助ケ且ツ其餘隙ノ地ヲ無用ニ屬セシ
メサルカ爲メナリ固リ培養ノ力ニ不足無ク餘
隙ノ地ヲ惜マサル者ト雖モ必ス耕作ヲ爲ス可
シト言フニアラス

四年ノ春季ニ至テ初メテ採葉ノ期トス此時ニ
至テハ茶株既ニ長茂スルヲ以テ畦間ノ耕作ヲ
爲シ難シ只耘鋤培養ノ力ヲ下ダス可シ
培養ノ肥糞ハ山地水濱海涯等各其地ノ異ナル
ニ因テ便否モ亦同シカラス而シテ高價ノ肥養品
ハ其功ヲ奏スルヲ必ス多シト雖モ能ク彼此ノ
價直ヲ較計セサレハ得失相適當セスシテ永ク
蓄盛ヲ保ツヲ得可ラス又必ス高價ノ肥糞ヲ
要スト云ニモアラズ宇治近傍ノ地ナル池ノ尾
櫃川ノ如キハ山地ニシテ肥糞ノ運輸甚タ不便

ナルカ故ニ往昔ヨリ之ヲ用ヒス春秋ニ柔軟ナ
 ル野草ヲ刈リ之ヲ株根ノ四圍ニ埋メテ以テ培
 養スルヲ常トス俗之ヲ下草然ルニ其茶ハ煎茶
 製ノ最上品ニシテ宇治ノ製モ及ハサルモノ有
 リ是ヲ以テ培養ノ功大ニ劣ラサルヲ知ル可シ
 支那ニモ亦此ノ法ヲ用ユ則支那人ノ説ヲ左ニ
 譯記ス
 凡ソ傾斜ナル園地茶木ノ培養タルヤ其根圍
 ニ新月形ノ淺穴ヲ穿テ極メテ柔軟ナル枯草
 ヲ入ル一周歳ニ次五月タル可シ云々五月ハ陰

是ヲ以テ見レハ支那人モ之ヲ用ユルヲ明カナ
 リ然レモ獨リ斜傾ノ園ノミニ用ユル者ノ如シ
 何ソ斜園ニ限ルヲ有ランヤ平園ニモ用ヒテ大
 ニ功有ルヲ經驗有リ
 凡ソ草ニ乏シキ園地ハ甚タ稀少ナルヲ以テ他
 品ニ比スレハ最モ得易キ品ナリ故ニ培養品中
 ノ第一ト云テ可ナリ其功驗ヲ以テ云ハ草ニ
 ノ低下ニシテ得易ク廣ク用ノ多シト雖モ其價
 又支那人ノ説ニ云フ
 又支那人ノ説ニ云フ

豆醬大豆三斤 寒中ノ清水七斤ヲ合セテ磨細
 シ大豆三斤等ニ裝ヒ土中ニ埋メ置腐敗セシ
 ノ三分清水七分ヲ混合シ與フルモ有リ亦タ
 多分ヲ佳トス此ノ豆醬ヲ用ヒタル茶葉ハ多
 分香味ヲ生スルト昔ヒ傳ヘタリ云々
 支那ハ從來人畜ノ糞屑及魚類等ヲ以テ肥養ノ
 品トセサルカ故ニ此ノ豆醬ヲ用ユルナラン而
 ノ其茶多分ノ香味ヲ生スルト云フハ肥養ヲ與
 ヘサルモノニ比スレハ或ハ然ラン然レモ言ヒ
 傳フト云フヲ以テ見レハ經驗ノ確據有リトモ
 云フ可ラス猥リニ信シ難シ但地形ニ因テハ之

用ヒテ其便ヲ得ルコトモ有ラン然リト雖モ廣
 大ノ園ニ溉クニハ許多ノ豆醬ヲ蓄ヘサル可ラ
 サルカ故ニ大ニ本資ヲ費用シテ其得ル所ヲ以
 テ償フコト能ワサルノ恐レ無キニアラス
 支那山園培養ノ說ニ曰凡ソ山園ニハ茶木ノ
 畦間ニ細キ水路ヲ通シ雨水ヲ流去スヘシ若
 シ留滯スルコトアレハ茶根ニ濕氣ヲ與ヘ大ニ
 害有リ又雨水ノ根圍ニ流灌スレハ其上土ヲ
 推シ流シ根底ノ鞏固ニ妨ケアリ云々
 畦間ヲ小シク穿スルハ大氣ノ流動ヲ根圍ノ

地中ニ撥クニ便リナルニ因テ特リ山園ニ限ラ
ス必ス其功有ル可シ
支那ノ地ハ我國ト寒暖地氣大同小異ナルヲ以
テ或ハ能ク適スルモノ有ラン故ニ參考ノ爲メ
ニ之ヲ採録ス此ノ他我國各地ニテ用ユル所ノ
培養ノ方法肥糞ノ品類多シト雖モ人ノ皆能ク
知ル所ナルヲ以テ今此ニ贅セス

第二條 採茶ノ事

採茶ハ種栽ノ年ヨリ四年ニ至テ初採ス可シ蓋
シ已テニ斯人如ク年月ヲ經過スレハ其株根堅

實ニシテ地ノ膏澤ヲ吸取スルノ力充テテ周ク
枝幹ヲ養フニ足ルヲ以テナリ但シ其園ニ災害
無ク順路ヲ以テ長茂スレバ此ノ時ニハ大畧一
株ニテ生葉ノ重量二十匁ヲ得可シ園地一段歩
六貫目則生葉十是レヨリ以後年々必ス増加ス
大ニ増加スルハ大概十年間ヲ期トスレバ培養
ノ功ニ依テ或ハ猶三四年間ノ小増加チ加フル
リ而シテ培養ノ力ヲ關カス又採葉ノ方愚説有リ
ステ忽畧セサルキハ十年ニ至テハ一段歩ノ生
葉百貫目ヲ得可シ是レ則上園地ニシテ其培養
ノ力モ充分ナル處ヲ以テ云フナリ故ニ種栽

人始メ目途ヲ立ツルニハ十年後一段歩ノ園地
 ニ生葉七十貫目ヨリ七十五貫目マテ得ルヲ
 期スルギハ意外ノ違算無クシテ徒ニ資本ヲ消
 損スルノ患ヲ免ル可シ
 採茶ハ其摘採ノ方ニ因テ所得ノ多寡ニ差違ヲ
 生スルヲ大ナリ慮ラサル可ラス故ニ今周ク採
 茶ノ現況ヲ我國ノ採摘ハ大概人ノ皆能ク知ル
 ナラズ覺者其舉ケテ而ノ愚見ヲ述ヘ人ヲシテ
 煩サス厭フ勿レ其舉ケテ而ノ愚見ヲ述ヘ人ヲシテ
 擇テ從フ所有ラシメント欲ス蓋シ茶葉摘採ノ
 時節ハ各地寒暖ノ度ヲ殊ニスルヲ以テ一般ニ

同シカラス然レ日本普通ハ大率八十八夜前
 後ヲ以テ其時トス宇治ニテハ八十八夜ノ三日
 前ヲ初採トスレモ實ハ五六日後ニ至テ初採ス
 ル者多シ而メ凡ソ日數十五日間ニ終ル煎茶ノ
 園ハ再度ノ芽ヲモ採リテ製スレモ濃茶薄茶ノ
 園ハ再芽ヲ採ルト無シ再芽ニ妨害有リト云ヒ
 傳フ如何ナル可シ由各地ニテ宇治ニ效フ者皆之
 ナルヤ猶考フル可シ各地ニテ宇治ニ效フ者皆之
 ニ准ス又西南暖和ノ地ニハ山野中ニ天然生
 ノ茶株多シ日向大隅肥後筑後豊後其際又種栽
 スルモ有リ而ソ皆鹿製ヲ目的トスルヲ以テ新

芽ノ長大ナルヲ待テ新古ノ葉ヲ擇ハス手ニ任
カセテ之ヲ攪探シ其株ヲシテ恰モ枯枝凋落
後ヲ見ルカ如クナラシム又一ハ新芽ノ充分長
大ナルヲ待テ鎌ヲ以テ其株ヲ芟取シ之ヲ束積
シテ荒蕪ヲ覆フテ壓蒸シ而シテ後テ其枝ヲ取テ
之ヲ振へハ葉盡ク墜ツ是レ探茶ノ最モ疎ナル
モノナリ然レ田地質風氣能ク茶ニ適スルカ故
ニ次年ノ産ヲ減スルニ至ラスト雖モ究竟蕃盛
ヲ進ルノ方ニ非ス且ツ其製濫惡ナルヲ以テ障
碍有ラサルナリ支那ニテハ一新枝ニ五六葉ヲ

發シタルトキ其下端ヨリノ二三葉ハ一葉ツ
テ摘ミ夫ヨリ上端マテハ新枝共ニ摘探ルト云
フ然レハ我國從來ノ探茶ト大ニ異ナルモノ無
シト謂可シ然ルニ印度ニテハ春季新芽ヲ發セ
シヨリ之ヲ摘探シ十月ニ至ルマテ聯續之ヲ採
ルト云是レ蓋シ印度地方ハ從來茶木有ルニア
ラス始メ其種子ヲ支那ニ求メテ之ヲ種蒔セシ
モノナリ故ニ茶株ヲ重ンスルヲ我國及支那ノ
比ニアラス是ヲ以テ栽培及摘探トモニ其方ノ
宜キヲ得ルガ爲メニ斯ノ如ク摘探スト雖モ茶

株ノ盛榮ヲ妨害スルノ恐レ有ラサルナリ特ニ
 其地ノ暖度風氣ニ適應スルノミニアラサル可
 シ
 余曾テ採茶ノ方ニ心ヲ注クヲ既ニ久シ廣ク繹
 子周ク詢ヒ其可ナルヲ擇ブニ未タ大ニ異違有
 ルヲ見ス大同小異ト云可シ但此ニ一ノ方有リ
 屢之ヲ經驗セシニ其利益大ニシテ茶木ノ盛榮
 ナ害フヲ無シ從來ノ摘方ニテハ十五日間ヲ大
 段初中終三等ニ分ツニ初シノ五日ハ其葉上等
 ノ品ヲ得レモ中ノ五日ハ新芽漸ク長シテ初メ

ノ品ニ及フヲ能ハス終ノ五日ニ至テハ新葉既
 ニ長大ニシテ初中ノ品ニ比スレハ甚タ劣リテ
 最下等ノ品トナルナリ故ニ其摘方タル初メ新
 葉ノ發芽シタルキニ大概其葉ノ大サ我希望ス
 ル所ニ適シタルキ其恰好ノ葉ノミヲ採リ又再
 芽ノ長スルヲ待テ初探ノ時ノ如クシテ之ヲ採
 ルヲ三回四回ニ至ル可シ喻ヘハ秋芽ニ至ルマ
 ナ之レヲ採ルトモ害無シ而シテ摘終リタル時ニ
 直ニニ抄末ヲ芟除スルヲ庭樹ノ贅梢ヲ芟リ去
 ルカ如ク鉄又ハ鎌ノ類ニテ芟ル可シ蓋シ斯ノ

如クニシテ摘採スレハ其全量ノ茶葉二倍ノ多
 量ヲ得可シ而シテ茶葉ノ品位モ初採ノ時ニ異ナ
 ルヲ無シ但其摘採ノ時間ヲ費シ採手ノ員數ヲ
 増加スレバ其備價ノ増金ト茶葉ノ増量トナ比
 較スレハ増量過分ニシテ大ニ利益有ルナリ本
 年明治勸農局ニテモ其官園中ニ種裁シタル茶
 葉ヲ採ルニ此ノ方ヲ以テセシカ果シテ多量ノ
 生葉ヲ加増セリ
 又越後ノ村松邊ニテ一種ノ採方有リ此ノ採方
 ハ其類他ニ少キヲ以テ之ヲ左ニ記載ス

一番摘
 八十八夜ヲ十日程過キテ摘ム凡ソ十五日間
 ニ終ル摘終テ一番ノ手ハツレト云テ又摘ム
 凡ソ九日間ナリ
 二番摘
 一番手ハツレ摘終リヨリ凡ソ二十日程ヲ經
 テ摘ム凡ソ八日間ニ終ル又二番手ハツレト
 云テ摘ム凡ソ五日間ナリ
 三番摘(トヨウジン)ト云フ
 二番手ハツレ摘終リヨリ凡ソ八九日間程ヲ

經テ摘ム凡ソ十二日間ニ終ル又三番手ハヅ
 レト云テ摘ム凡ソ五日間ナリ
 此三番手ハヅレテ摘ミ終ルトキハ既ニ七月
 ナ過キテ八月ニ入ル之ヲ通常トス又其年ノ
 模様ニ因リテハ四番手ハヅレマテ摘ム有
 リ四番手ハヅレハ摘ム三日間ナリ
 又支那ニモ一説ニ七月曆陰マテ採摘スルノ説アリ
下條ニ是ヲ以テ見レハ三回四回ノ採葉ハ茶
 株ニ害無ク収獲ニ利有ルヲ明カナリ
 第三條 支那茶園培養採葉ノ説並移植

春一月ハ未タ冷氣去ラサルカ故ニ着手スヘカ
 ラス二月ニ至レハ暖氣漸ク催シ園中ノ枯草發
 生セハ鐵拿我ノグマヲ以テ草根ヲ鋤去スヘシ三
 月ハ茶已ニ萌芽セハ蓋芽旗體包茶毛峯毛尖貢
 茶仙掌青茶等ノ名茶ヲ製スヘシ夏四月茶葉已
 ニ長セハ谷芽珍芽旗鎗雀舌壽眉等ヲ製スヘシ
 尤モ以上ノ各製ハ中旬マテニ終ルヘシ夫ヨリ
 紅茶ノ正品精品極品上品馨品等ノ五品ヲ製ス
 五月ハ正品烏龍ヲ製スヘシ是亦タ中旬ニ終リ

夫ヨリ本色緑茶ヲ製ス六月モ亦本色緑茶ヲ製
 ス秋七月ハ尙間々緑茶ヲ製出スル者アレトモ
 其餘ハ製ス可ラス八月ハ茶樹漸ク疲レ多ク之
 レヲ摘メハ則テ枯死スル有ル可シ此時ニハ
 平鋤我刀ヲ以テ諸草ヲ鋤去シ培養ス可シ其培
 養方法ハ山上刈リ取りタル軟キ枯草ヲ樹根ニ
 與フベシ尤モ多分ナルヲ佳トス九月ニ至レハ
 茶木先キニ與ヘタル枯草ノ養分ヲ受ケ老葉黒
 色ヲ帯ブ可シ冬十月ニハ刻々園中ヲ見回り
 網等ヲ拂ヒ去ルヘシ十一月ニハ氣候巳ニ寒冷

ナレハ都テ栽培ハカラス老葉ヲモ拂フ可ラ
 ス十二月ニハ寒冷甚ダシケレハ茶木冷凍枯萎
 シ生靈ノ眠ニ就キシカ如ク人之ヲ動搖セハ枯
 死スルヲ恐アリ
 先ツ茶木ヲ掘リ取り命根ノ茶木ニ五根アリ
 又定根ト云フ左前後ナリ副根三尺アレハ
 ト云ヒ又發達及ヒ後根ト云フ根三根アリ
 其二尺ヲ快利ナル刃物ニテ切り去リ移植ス可
 シ是レハ老木移植ノ方法ナリ又山中ニテハ一
 種ノ至便ナル方法アリ茶木已ニ老疲セルハ

盡ク燒キ去リ刻々鐵拿以テ塊土ヲ碎キ泥土ヲ
 攪平セハ地中自ラ發生ス可シ世人ノ所謂自然
 茶ナルモノ是レナリ發生ノ后テ樹幹漸ク肥へ
 枝葉茂ルヲ待テ一週歳二月五月八月三次ノ培
 養ヲ加へ損傷セサルヲ最モ緊要トス老木ヲ移
 植シ能ク培養ヲ盡セハ凡ソ十余年ノ繁茂ヲ得
 可シ實生ノ茶木ハ凡ソ三十余年ヲ保ツ可シ實
 生ノ茶木ハ一尺二寸位ノ時移植セハ夫ヨリ二
 十七八年ヲ保テ老枯ニ至ル可シ培養都テ異ナ
 ルヲナク何レモ枯草ヲ用ユ可シ

右二條ノ説ハ氣候寒暖ノ度ニ因テ或ハ悉ク受
 用シ難キモノ有レテ大ニ乖違スルモノ無シ故
 ニ參考ノ爲メニ之ヲ記載ス
 第四條 茶ノ品位并効用及元素分析表
 從來我國茶ノ品位ヲ定ルハ其風味ヲ本トシ葉
 形葉色之ニ次ク而ソ往昔ヨリ支那ニ効フテ製
 スル者今ニ存スト雖肥前國類漸次凋衰シテ
 寡少ナルカ故ニ此ニ論セス宇治ノ製ハ精密ニ
 シテ盛大ナリ故ニ之ニ就テ之ヲ辨ス夫レ宇治
 製ハ培養ト製方トノ巧妙ヲ以テ微シク甘味ヲ

生ス上等ノ茶ハ甘味中些少ノ苦味ヲ含ミ喫后
口舌ノ際清凉ニシテ心神快爽ヲ覺ヘシム是ヲ
以テ水質ヲ擇ヒ湯沸ノ度ヲ詳ニセサレハ忽テ
其甘味ヲ失フ此ノ風味ヲ以テ本味トシ從テ差
等ヲ分別スルヲ至微至細ニシテ數十種ト爲リ
亦其葉形葉色モ些ノ異様有リ此ノ製ハ我日本
ノ發明ニシテ支那モ未タ製セサル所ナリ斯ノ
如ク精密ナリト雖モ其本質ノ如何ナルヲ思繹
スル者無クシテ人間日用必需ノ物タルヲ知ラ
ス只其風味ヲ嗜ム者ノミ之ヲ愛シテ上品ヲ賞

スレモ翫味セサル人ハ之ヲ喫シテ其品等ヲ分
ツヲチ得ス其價ノ貴卑ヲ辨別スルヲ能ワサル
可シ是レ特リ茶味ニ疎ナル人ノミニアラス老
熟ノ人ト雖モ微細ノ品位ヲ分ツニ至テハ或ハ
誤リ無キヲ能ハス之ニ熟スルハ翫茶家ノ一ノ
名譽トスルヲ以テ知ル可シ然ルモハ則普通ノ
人ニ於テハ其品位ヲ知ルヲ得ルモ可ナリ又
知ラサルモ大ナル妨無シ汎ク之ヲ論スレハ數
十等ノ品位ヲ分別スルハ人間ノ幸福上ニ於テ
大ニ關係スルモノ無シト謂フ可シ獨販賣上ニ

於テハ其品位ニ從テ價直ヲ分ツテ數等ナルル
 ハ必ス利ヲ得ルヲ多キヲ以テ製茶家ハ其品位
 ナ分ツテ多キヲ好ム所以ナリ然ルニ百物皆其
 主トシテ用ヲ爲ス所ノ輕重細大ニ因テ高卑ヲ
 分タサル可ラス劍ハ利鈍ヲ以テ品位ヲ異ニシ
 馬ハ駿駑ヲ以テ貴賤ヲ均シクセサルカ如ク飲
 食ニ供スル物ハ人ノ健康ヲ資ルノ多寡ヲ以テ
 品位ヲ定メサル可ラス故ニ茶モ亦只其風味ノ
 ミヲ以テ品評スルハ則馬ヲ評スルニ駿駑ヲ以
 テセス劍ヲ評スルニ利鈍ヲ以テセサルカ如ク

懸空ノ説ト謂フ可シ是ヲ以テ勸農局分析表及
 試驗説ヲ擧ゲテ周ク人ヲシテ人間ノ欠ク可カ
 ラサル所ノ物タルヲ知ラシム

茶ノ試驗説

凡ソ茶ノ品等ハ專ラ茶ノ効力(即揮發性油色
 素、鞣素、茶素等ヲ總稱ス)ノ多寡ニ因ルナリ今
 其各品ノ茶ニ含テ所ノ量ヲ定ムルニハ先ヅ
 茶葉ヲエトドル三分アルコホル一分ノ混和
 液ニ投シテ茶ノ効力ヲ浸出シ其多寡ヲ量ル
 然レモ茶葉ノ燒灰ニ含ム所ノ原質(即鐵、滿、俺

等)モ亦品等ニ關係セサルヲ得ス依テ更ニ茶
 葉ヲ燒キ其殘餘ノ灰ヲ量ル此兩件ニ因テ大
 畧其品等ヲ知ルニ足ルト雖モ茶之効力中ニ
 含ム成分ノ中鞣素茶素ノ分量ニ因テ亦少シ
 ク差異ナキト能ワス故ニ鞣素茶素ノ量ヲ別
 ニ分析シ合テ次ノ表中ニ擧ク
 茶之品類並試驗表

茶名	分中効力	分中鞣素	分中茶素	分中燒灰
第一析物	二九、七七	一四、二〇	二、九三	五、六七
第二玉露	三四、〇〇	一五、六〇	二、四二	五、八〇

第三薄茶	三五、七五	二二、七二	三、四四	六、一五
第四濃茶	三五、六五	二五、二〇	四、二一	六、〇五
第五飛出茶	一九、一二	一四、二〇	四、一五	四、九七
第六晚茶	二七、七五	一三、〇六	一、九八	五、〇六
第七輸出茶	三〇、四〇	二三、九六	二、五七	四、六八
第八支那練茶	三六、〇〇	一九、八八	三、三六	四、一〇
第九支那黑茶	三〇、八五	一四、〇六	四、六七	五、六〇
第十支那紅茶	三三、〇七	一四、二〇	一、九四	五、七三
第十一支那綠茶	三七、三五	一五、九五	二、九三	五、七三
第十二日本紅茶	三六、二五	一五、七五	二、九六	五、二八

右ノ表ニ因テ考ルトキハ日本製茶ト支那製
 茶ノ如ク鞣素及ヒ茶素ニ富ル故ニ其滋養ノ
 効他ノ茶類ノ右ニ出ルヲ知ル可シ
 又其焼灰ハ諸種ノ茶ニ於テ百分ノ四ヨリ六
 マテノ間ニアリ是其質偽ノ品ニ非ルヲ証ス
 ルニ足レリ
 支那製茶ハ其製造ノ時ニ當リ他ノ香氣アル
 樹葉又ハ草花ヲ和シ以テ其香分ヲ與フレ
 日本製ノ茶ニ於テハ此ノ如キ事ナシ
 上ニ舉クル所ノ諸種ノ茶中悉ク滿庵ヲ含ム

之ヲ秤量スルニ第一種ニ在テハ百分ノ一〇
 四第二種ニ在テハ百分ノ〇二一ナリ其他大
 抵同シ
 試ニ茶ノ生葉ヲ焼テ灰ト爲シテ之ヲ檢スル
 ニ尙滿庵ヲ檢出ス然レハ此ノ滿庵ハ日本茶
 樹固有ノ成分タルヲ知ル
 茶素ハ諸種ノ茶中ウーレ氏ノ法ニ從テ試験
 スルニ結晶形トナリテ分離スルモノナリ鞣
 素ハヘーリグ氏及ヒミユルレル氏ノ法ニ因
 テ之ヲ試験スルモノナリ

茶之効用
 茶ハ山茶科ノ種屬ニシテ其成分第一茶素其
 他鞣素揮發性油色素滿俺等ナリ尙前ニ載ル
 試驗表ニ出セリ
 總テ茶及ヒ茄菲烟草甘豆餅香料酒類ノ如キ
 ハ穀肉菓菜等ノ如ク之ヲ飲食スレハ
 補全スルモノニ非ラスト雖モ衆人一般ニ嗜
 好スル所ノ飲料ニシテ衛生上ニ於テ其効用
 亦輕カラサルモノトス因テ次ニ其効害ヲ畧
 記ス

(効)適宜ニ之ヲ服用スレハ神經ヲ刺衝シ精神
 ナ鼓舞シ智力ヲ増シ身軀ヲ壯健爽快ニシ筋
 神經等ノ如キ機關ニ血液ノ輸送ヲ催進シテ
 其作用ヲ盛ニシ滋養ヲ助ケ筋肉ヲ健強ナラ
 シメ且ツ動脈管中血壓ヲ強クシテ尿ノ分泌
 ナ增多ス勞動及ヒ饑渴ニ因テ身體始メテ衰
 弱スルモノハ之ヲ服用シテ一時ノ壯健ヲ覺フ
 ト雖モ其甚タシキ者ニ在テハ却テ害有リト
 ス
 其含ム所ノ滿俺及鐵ハ体中血液製造ニ於テ

甚々有用ノモノトス
 安賢母尼製劑及ヒ麻酔劑ノ消毒藥トシ用ヒ
 ナ効アリ
 〔害〕身体ヲ勞動セス坐シテ業ヲ執ル等ノ者及
 ヒ身体勞養不足ノ者飲食消化不良ノ者小兒
 及ヒ虛弱ノ婦人或ハ之ニ慣レサル者殊ニ之
 ナ多服スレハ害有リテ不眠頭痛腦中充血消
 化不良心悸動或ハ慢性癆瘵等ノ症ヲ發ス
 支那ニ於テ屢茶ヲ質造スルニ他ノ樹葉ヲ以
 テスル有リ其害甚シカラス之ヲ監別スル甚

タ易シ
 洋説阿仙藥丹禁或ハ他ノ綠色ナル礦物ヲ茶
 ニ混和シ綠茶ヲ質造スルモノハ其害甚々恐
 ル可キモノナリ
 以上ノ試験説及ヒ分析表効用等ノ記ハ則勸農
 局ノ調査ニシテ茶ノ品等ヲ定ルノ準的ト謂テ
 可ナリ又米國シゼイマルダア氏カ茶ノ効用説
 及ヒ分析表ハ大同小異ニシテ別載ニ及バサル
 モノ、如シト雖モ茶ノ元素ヲ悉ク記出シテ細
 密ナルヲ以テ更ニ之ヲ譯出ス

元素	緑茶百分中	紅茶百分中
ボレタイル、オイル	零、七九	零、六〇
クロリフヒル	二、二二	一、八四
ウオツクス	零、二八	
レジン	二、二二	三、六四
ゴム	八、五六	七、三八
タニツクエツシイード	十七、八〇	十二、八八
ケーフヒン	零、四三	零、四六
エキストラクチャー	二十二、八〇	十九、八八
ミリエナツクエキストラクト	二十三、六〇	十九、一二

オルビユメン	三、〇〇	二、八〇
ライニン	十七、六八	二十八、三二
ソート	五、五六	五、二四
エボシム		一、四八

茶ノ効用

緑茶ハ其色青^キ黒^ク或ハ綠色或ハ鳶^{トビ}色^{イロ}ニシテ香

氣他ノ茶ニ異ニシテ人ヲシテ爽^{サッ}然^カタラシム

之ヲ喫スレハ稍^ヤ舌^{ゼツ}上^ノヲ微^ヒ衝^ツス而^{シテ}快^クキ苦^ク味

アリ其湯色ハ淡^{タン}青^キノ草色ニシテ黄^{ワウ}色ヲ帶^ツブ

香氣ハ青草ノ匂^{ニホ}ヒ有^リ

黒茶(即紅茶)ハ其色黒クシテ蔦色ヲ帶フ其馨
 シキコトハ同シト雖ニ綠茶ニ比スレハ聊カ澹
 薄ナリ味ハ苦味ニシテ亦収縮ス其湯色ハ蔦色
 ナリ香味共ニ人ノ舌鼻ニ感スルコト著切ナリ
 ボレニテイルオイル上ニテ其揮發力ハ最モ他ノ
 發動スル所ノ一ニシテ其揮發力ハ最モ他ノ
 元素ニ勝ル古茶ハ此ノ揮發力漸次ニ減少ス
 ルカ故ニ新茶ノ人ノ神經ヲ刺激スルノ力ニ
 及ハス「ダニツクエツシード」上ニシテ是レモ神經ヲ
 衝動セサルニアラス「ケーフ」ニシテ「エキスト」ラ

ク、ナール、オイル。ダニツクエツシード。エキスト
 ラク、ナール、ブ、此ノ三種ハ綠茶ニ最モ多シ「ケー
 フ」ニシテハ凝結スルノ性質有リテ苦味ヲ含ク
 茶ハ人ノ神經ヲ衝動スルノ効用有ルヲ以テ
 之ヲ喫スレハ神氣清爽ニシテ倦惰ノ氣ヲ消
 却ス故ニ過飲スルカ又ハ喫茶ニ慣レサル人
 ハ臥寢ノ時ニ至テモ睡ルコト能ハサルコト有リ
 斯ノ如キ性質ト雖モ揮發ノ藥力ニハ比ス可

ラス是ヲ以テ健康ノ人ニシテ恰好ニ服スレ
ハ害有ルヲ無シ但シ聯續シテ過量ニ服スレ
ハ腦肺共ニ刺激ニ過キテ終ニハ神經衰弱ノ
恐レ有レモ本神經ニ發基シタル頭痛病ニハ
大ニ功能有リ
又常ニ睡眠多ク身体倦懶ヲ覺ユル人ニハ之
ヲ其人ノ適度ニ服セシムレハ必ス其倦懶睡
眠ヲ減少スルノ功有リ
茶ハ只神經ヲ刺衝スルノミシテ功カナルカ故
ニ直接ニ血液ノ循環ニハ關涉セス

ハアバート學校ノ博士プラツドノ經驗說ニ
云倦勞シテ心神共ニ怠慢ヲ覺ユル時ニ茶ヲ
喫スレハ凡ソ二時間ヲ經テ神氣清爽ニシテ
忽チ心ヲシテ活潑ナラシメ思慮精詳ナルヲ
得ルナリ
茶ハ腦力ヲ強壯ナラシムルカ故ニ今マテ讀
ミ難キ書ト雖モ茶ヲ服スレハ讀ムヲ容易ナ
ル可シ反覆思慮ヲ凝ラシテ通曉セサルヲモ
困苦ヲ費サスシテ通明ナルヲ得可シ
又之ヲ過量ニ服シテ凡ソ二時間ヲ經レハ心

悸動シテ腕微クフルウ
 右ニ舉ル所ノ我國勸農局及米國ジセイマルダ
 ア氏ノ分析試驗經驗等ノ說其趣意皆同一ニシ
 テ大ニ異ナルモノ無シ其人間ニ効用有ル所ヲ
 見レハ則製方ノ精粗ヲ論セス茶ハ日用人ノ欠
 ク可ラサルノ要品タルヲ明カナリ往昔ヨリ好
 デ人ノ需用スルモ偶然ナラサルヲ知ル但戒ム
 ル所ハ適度ヲ顧ミス多服ニ在ルノミ夫レ過量
 ニシテ害ヲ爲スハ特リ茶ノミニ非ス穀肉菓菜
 其他身外ノ保生ト雖モ放縱ニシテ其度ヲ失ス

ルトキハ皆然ラサル無シ
 是ヲ以テ茶ハ我カ習慣スル所ノ風味ノミヲ以
 テ品類差等ヲ分別スルノ誤リタルヲ知ル可
 キナリ
 或ハ云茶木ニモ亦各種ノ別有リ因テ自然ニ茶
 ノ品位ニ差等ヲ生ス云々ト固リ茶木種類ノ別
 聊カ無キニ非ス故ニ或ハ其含ム所ノ元素中ニ
 毫毛ノ多寡有ルモ測ル可ラスト雖モ必ス元素
 ナ異ニスルモノ無シ元素異ナレハ別種ノ木ナ
 ルヲ以テ疑テ容ルニ足ラス而ノ製後ニ至テ大

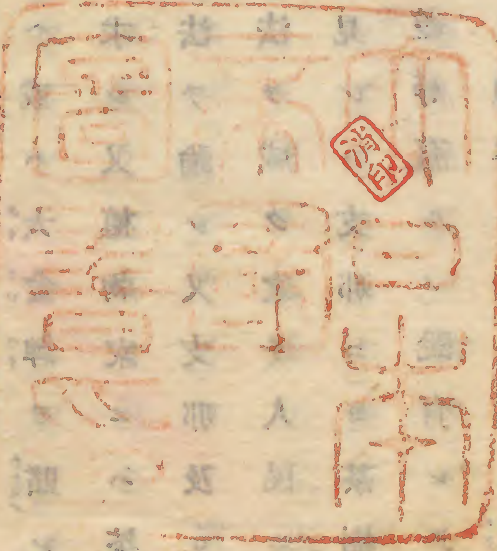
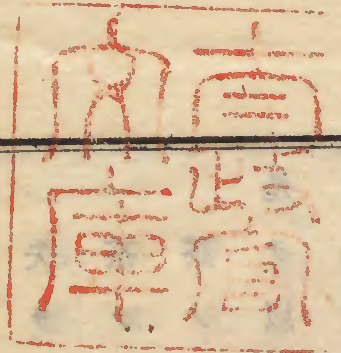
二差等ヲ隔絶スルモノ無シ印度地方ナル英國
 茶業ノ會社ニ於テモ一時其說ヲ流傳セシモ遂
 ニ大ナル殊別無キヲ分明ナルニ至レリ本年多
 田元吉石河正龍兩氏ノ勸農局ノ命ヲ奉シ印度
 度ヨリ歸航シ官ニ上申セシ書中ヨリ採録シテ
 之ヲ証シ併セテ英人起業ノ精神ヲ知ラシム
 多田石河兩氏ノ記ト云フハ
 此書中ヨリ採録シタルナリ
 一方今東西印度ニ於テ隆盛ナル産茶ノ業ノ創
 起ノ日ハ彼ノ一千八百四十年ノ頃農務會社
 ニ於テ議決シ始メテドクトル、コルドル氏ヲ

支那ニ發遣シ茶樹栽培及ヒ其製法ニ關スル
 方法ヲ質問セシメ福建省廈門地方ヨリ若干
 ノ種子ヲ齎シ歸リ「カルカタ」本草園ニ於テ是
 ヲ箱ノ中ニ播種シ然シテ其萌芽スルニ及ヒ
 テ東北州「アサム」及ヒ「コルモク」ニ送
 リ爰ニ公園ヲ開設シ始メテ之ヲ下植セシメ
 此地ヨリ「キヨマ」及ヒ「コルワル」ニ分種シ
 夫ヨリ各地ニ分賦セリ其後支那ニ於テハ各
 地其種類相異ナルモノアリテ今南方ノ地ニ
 栽培スル者ハ其性質北方ノモノト同シカラ

ストノ説起リシヨリ其如何ヲ討究シ且ツ各
種ノ良茶ヲ得ムカ爲メ再ヒフナルチユン氏
ヲ選ヒテ更ニ發遣セシメ支那國產茶有名ノ
地方ニ到リ綠茶ハ徽州「ム」井「チ」ヨウサン
「シルクルアイラント」及ヒ寧波近傍ナル「チ」井
ンダン「ヨリ」取り紅茶ハ福州ナル武彝山「チ」イ
ンサン「及ヒ」ナンカン「ヨリ」取り以上各地公安
徽浙江福建ノ三省ノ内ナリ是ヲ西北州「コ」ヒ
スタ「ン」及ヒ「バン」シヤツ「プ」ニ播植セリ然レモ
其性質前者ニ相異ナル「フ」無シト云ヘリ如此

之ヲ數個ノ公園ニ移植シ其求ノニ應シテ種
子ヲ與ヘ或ハ大金牌ヲ賭シテ栽茶製茶ノ得
失ヲ購求シ又植物家ニハ茶樹ノ性質及ヒ栽
茶ノ方法ヲ論シ又支那及ヒ瓜哇等ノ栽茶製
茶ノ方法ヲ咸ク之ヲ人民ニ布告シ云々
是ヲ以テ見レハ支那ニモ茶樹ニ異種アリテ而
ノ品位ニ差等有ルノ説有レモ未タ大ニ區別ア
ルヲ知ラス但俗ニセリ葉ト唱ヘテ甚タ小細ナ
ル茶葉有ルハ品位普通ノ茶ニ如カス又俗ニ唐
茶ト唱フル大葉ノ茶アリ其大ナル殆ト桑葉ニ

比^ニス可^シ今勸農局ノ園中ニ五六株有^レトモ未^ダ
タ製スルニ至^ラス故ニ經驗無^キヲ以^テ敢^テ優^ム
劣^ヲ論^セス



茶業必要上卷終

